扨て此處にいよ〳〵わが光輝ある保健部の歴史が始まるのである。即ち保健部は誕生と同時にその事務を運動部より引繰ぎ、更に南溟寮の輿望に答へて各般の保健衛生設備の充實が圖られた。醫療器具、藥品棚は五寮一室に移され又醫務室が保健部の管理下に移された。そして寮務室北隣の室に於て毎週火、木、土の三回校醫坂井先生によつて受診希望者の診斷及び保健相談が行はれた。その外寮生中に病人の出來た場合は或は藥をあたへ、或は坂井先生の御來診を乞ふ等積極的活動が開始された。

やがて第一學期も終り夏休みとなつた。この頃から時の大和總務、遠田副總務の指導より新しき體制の下に、新しきより高き文化を建設せんとする創造の意味に溢れた運動が心ある寮生の間に起りつゝあつた。それはやがて八月下旬の寮生有志の合宿訓練となつて具體化し、新しき創造の理念の下に寮の新體制樹立の運動が起された。わが保健部委員四名が欣然之に參加した事は勿論である。かくして寮の新體制は確立の途についた。そして九月となるや內面的な——精神的と言はうか——面に附隨して外面的にも、創造的な面が見られて來た。而して之に伴つて保健部の事務も又次第に煩雜となつて來た。便所には便所下駄が備へられた。掃除用バケツに水を入れるためには各洗面所に二個づつホースが設けられる。箒木、塵取の補充がなされる。その他藥品としては消毒、外傷、風邪、胃腸等の各藥を充實し、醫療器具も又整備されて次第にその內容を豐富にして行つた。かくして九月に發表された新「寮生規約」中には保健部に關して決定された規約が收錄された。即ち、

第四節　保健部規約

九十三條　保健部幹事は保健部理事の指導の下に寮生の保健衛生に關する一般事務を掌り、進んで健康增進の任に當る。

第四十條　保健部幹事の任務左の如し。

一、醫療器具及藥品を常備し、醫務室を整理す。

一、便所、洗面所及浴場に於ける一般衛生に關する事務。

一、洗濯器具及寮內電燈の管理。

一、一週三回校醫による寮生の診察及保健相談に關する事務。

第四十一條　醫療器具及藥品は寮生に限り之を使用することを得。

醫療器具及藥品を破損し又は紛失せる者に對しては相當價格を辨償せしむることあるべし。

以上が之である。

やがて九月二十日の寮幹事交代となり、わが保健部からは合田、佐藤の兩君を送り、新進氣鋭の久保忠弘、野村正一君が迎へられた。而し合田君は五寮寮長として、又佐藤君は五寮にあつて同じくわが保健部の成長を見守られる事となつた。

生長と榮光

かくて十月の聲を聞く頃ともなれば、保健部は幹事四名の意氣全く投合し、和氣藹々たる中に、常に飛躍せんとする情熱を秘めて事にあたつた。四名の幹事は、初代幹事によつて創造された保健部の雰圍氣、即ちもり上る力を秘めた朗らかさ、靜けさ、さう云つたものをば更に成長させ發展させて行かうと心懸けた。保健部は若かつた。それだけに又初代は勿論二代目幹事にしてもよき傳統を創造せんとする熱意と誇とに燃えて居た。「吾々四名のその日〳〵の足跡が即ち保健部の成長の歴史の一頁々々なのだ。」この樣な意氣に燃えて眞摯な生活を續けて行つたのである。中旬となると寮の新體制に依つて教授が交替で寮へ宿直に來られる事となり、宿直室として當時の醫務室があてられた。此處に於て醫務室は二寮十三室に移された。而してこの終日陽の光を受ける明るい部屋で診察が行はれる事となつた。やがて秋風が身にしみる樣になつて來ると寮內には感冒の流行が見られ出した。風邪等で將來ある有爲な人材を損ふ樣な事があつてはならなかつた。保健部は寮生の風邪が大事に至らぬ樣色々と心を碎いた。保健部は必死の活動を續けた。而し流行は止みさうもなかつた。

丁度その頃であつた。南溟寮總務交代の時が迫つて來たのは。「南溟寮よ／新文化發祥の地たれ」と叫んで新しき體制を確立された大和總務、遠田副總務が、二百の寮生に心から惜しまれつゝ新總務と交替される事となつた。新總務には誰が推されたか。人材は吾が保健部から輩出した。即ち千代君が大和君の後繼として多難なるべき南溟寮の總務として迎へられたのである。

かくて先に送つた合田君は五寮々長として活躍されてゐたが、望まれて本校南溟報國會常務幹事となり、更に今又千代君を南溟寮總務として送る。保健部の榮光思ふべし。正に保健部の歴史に光輝ある一頁を添へたものと云へよう。

かくて吾々三名の幹事は千代新總務の良き輔佐者たらん事を誓ひ、且つ君の多幸なる前途を祈つたのである。而してその後に温厚にして情熱を秘めた野村正行君を迎へた。此處に吾が保健部は「有本さんを兄貴とし、三人は弟で全く兄弟の樣にガッチリ組んでやつて行かう」と誓ひ一段の頑張りを發揮して行つた。當時のわが部の空氣を部誌中の有本君の文中から覗つて見よう。

保健部は「家族的なる親しさ」を以て南溟寮を誇るのである。從つてこれ位ガッチリ意氣投合した部は他にあるまいと信ずる。肝膽相照の四字は保健部の四人の爲にのみ存在するかの感すら抱き度くなる一體高等學校は眞の友達を得る所だと言ふ然し乍ら、吾々は保健部に於て兄弟を得たのである。云々……

かくの如き良き傾向はやがて事務の上にもその影響を及ぼし幹事は全力を擧げて當面の問題たる感冒の流行防止にあたつた。而し容易にその猛威を挫き得なかつた。かくする内に十二月八日のあの歴史的な宣戰の大詔が下つた。吾々は日本民族が遂大な理想に燃えて決然鉾を把つて立ち上つた姿を自己の胸中にまざ〳〵と畫いて腕を撫すのであつた。而してこの新事態に應すべく學生も又一大飛躍を試むべきであつた。わが南溟の寮に於ても即應の各種の組織が整備された。保健部としては空襲等の場合に於ける救助作業の任務が加はつて來た。かくて携帯用として繃帯袋甲が新しく具へられ、應急手當用の各種の藥が備へられた。

吾々はかくて即應の構へを完成したのである。吾々はやがて此の記念すべき昭和十六年——保健部にとつても、又南溟寮にとつても、將又日本にとつても——を終つて希望にあふれた十七年を迎へた。

間もなく一月中旬の委員一部交替の時となつた。保健部に於ても創設以來すつと常にその快活な性格と强い實行力とを以て保健部の成長に盡くされた有本君を送る事となつた。君の下に喜樂を共にして來た五ヶ月を回顧してそゞろ感慨に胸ふさがるのである。そして君は更に一寮の寮長として、寮の有力なる推進者の眞面目を發揮される事となつた。而してその後に新鋭北村鑒史君を迎へたのである。二年生を全く拔り出して一抹のさびしさはあつたが、而し保健部は今四名の一年生の幹事によつてガッチリと引締められたのである。

一月二十六日、普通寺から水軍少將を迎へて壮關が行はれ

た。寮も奉閲を受けた。壮關官は「集團生活をなして居る寮に於ては、特に保健衛生設備の重點を結核防止に置いてその發生、蔓延を絶對的に防止する樣圖られたい」との懇切なる注意があつた。保健部として責任の重且つ大なるをしみ〳〵感じた次第であつた。

更に之に續いて醫務室の移轉を決定した。即ち寮外生にして校醫の診察を受けたいと希望する者が少くなかつたのであるが、診察室が寮内にある事は不便であつた。そこで保健部としても此の際斷然醫務室を學校の應接室へ移し、厚生部の福利班との共同管理下に置く事となつた。かくて保健部はその事務の合理化を圖り、次の飛躍に具へてゐたのである。三月中旬補講授業の開始と同時にわが部も活動を始め、殘寮生一同による寮の大掃除には、襷を上げて蚤取粉を撒き、又洗面所を徹底的に掃除する等により、一段と衛生的な健全明朗な寮たらしめんとする努力が拂はれたのである。更に十八日住友軍醫——本校第九回卒業生——を迎へて、結核豫防對策に關する座談會を娯樂室にて開催。種々と教へられ啓發される所が多かつた。而して結核豫防對策としては、運動部、炊事部等と共に協力して運動、柔養其他多角的に多方面から積極的に寮生に働きかけて寮生の結核場地に滅絶する事となつた。

かくて吾々はその重大なる使命に目覺め、「使命達成に邁進せん」の決意の下に、高き希望と厚い期待とを以て新入生を待つてゐたのである。

陽春四月、新入生は青雲の志に胸をとらせて入寮して來た。吾々には力强い後輩、よき友が與へられたのだ。「俺達は頑張るぞ！君達も頑張つて呉れ」かう叫びたい樣な氣持で、五寮一室の部屋の表に掲げられた木の香も新しい「南溟寮保健部」なる木札を吾々は見上げるのであつた。新入生に幸あれ！保健部に榮あれ！

×

翌てかくて此處に保健部は一才の歳を閲した。保健部の創設から成長への一年の歴史は今迄一應登き上げられて來た。保健部一年、感無量とはこの事か。全く光輝に滿ちた保健部一年の成長ぶりだつた。確かに保健部は輝々として南溟寮の一大推進者とも云ふべき人々を輩出した。又その爲か否かは見る角、確かに五寮は保健部が五寮一室に創設されてから非常に明朗な、活氣のある寮となつた樣である。輝かしき保健

部の成果よ。而し又なんとあわたゞしい毎日であつた事か。……だがそれも創造期にあつた保健部が飛躍せんとする前後のそれであつたのではなからうか。

兎に角、奥望を擔つて誕生した保健部が之だけの成長を遂げて來た。その後を繼いで我々四人が保健部の歴史を作る者として今後その負荷の使命と若き又善き傳統とに悖らぬ樣如何に活躍して行く積りであるか。之は保健部の歴史なる本論の範圍外の事であるから此處には述べない。がたゞ吾々は理事蒲原先生並びに初代幹事諸君の御努力に對し深く感謝すると共に全力を盡してその使命達成に邁進し、こゝ南溟の地に生るべき香高き新しい指導的文化の創造に寄與せんと言ふのみである。

× × ×

最後に保健部の生みの親たるべき人々の面影を傳へて永遠に遺さん。

保健部草分けの人及び初代幹事の面影

吉岡　清君（文甲一野球班）　保健部の誕生の緒を作られた方。荒削りで而も其處に何とも言へぬ温情をたゝへてゐる所は當に血も涙もある男と言つた所。熱と意氣の人でよき意味の野性的色彩の強い人物と云へよう。滑物がお好きと見え何時も赤茶になつた紐付きの羽織に、同じく茶色のボロ〳〵の帽子をかぶり、剃つても剃つても眉目だと云ふ頬鬚をなびかせて、颯爽たる御姿で大道闊歩する所を吾々はよく拜見した事ではある。

「强く逞しく素直に美しくそして正しく生きて下さい」と云ふ言葉を吾々に遺されて、今年三月此の寮を去られて行きました。

合田　仁君（文乙劍道班）　兄は温和なそして理智的な風貌の中に力强い熱情を秘めて居られる。非常な勉强家である。而も明るく落着いてゐる。五寮々長から南溟報國會常務幹事となられ、轉換期の本校のリーダアーとしてその着實と熱情とを傾け盡して努力されてゐる。

佐藤　博君（理甲文化部科學班弓道班）　熱に關する兄の知識はすばらしい。さすが理科マンである。兄は自ら「餘の下の力持」を以て任じて居られる。兄も又温厚にして、正確な判斷力のある情の人である。兄の「餘の下の力持」的努力と情熱が如何に創設當時の保健部の基礎を確固たるものたらしめた事か。現在は寮の會計審査員をされてゐる。科學班に

あつても又大活躍をされてゐる。

千代　勉君（理乙劍道班）　むくつけき男と誰やらが評したと言ふが、一寸見た眼にはなる程と思はれる。正に意氣と熱そのものゝ樣な人であるが、反面なか〳〵繊細な所があり人情味にあふれる兄の人格は、蓋し南溟寮總務として變動期にある寮を指導するに最適であらう。餘興は何でも來いの藝達者。それに菓子の好きなる、三度の飯よりと云ふ。

有本　明君（文甲二排球班）　健康のシムボル的存在の人。熱血漢にふさはしく、兄は又大食漢でもある。耳目麗はしく、男性的なる爲秘かに思ひをよせる向もありさうだが、兄の飄然たる態度は正に敬服に値す。兄は保健部の爲に常に助言と忠言とををしまない。良き先輩ではある。謠曲のオーソリティであり文化部謠曲會の育ての親である事排球のバックのレフトの名手なる事が御自慢現在一寮々長として頑張つて居られる。

× × ×

結　語

以上保健部に關する歴史を述べて來た。新しい機運に順應した保健部、それは我々保健部が求めて止まぬ理想である。而して、この理想は現實の力となつて、南溟寮に表れて來なくてはならぬ。過去二、三年間に於て南溟寮は餘りにも急激に發展した。而し時代の流に流されて、何時の間にか大きく膨脹したのだと非難されるかも知れぬ。だが、これ程迄伸展躍進した南溟寮だ。停滯は絶對に不可である。況や退歩等は思も及ばぬ。何處迄も進展あるのみだ。我々はその基礎が崩壞せぬ樣飽く迄支持するのみならず、之れを生成發展せしめなければならぬ。

創造とは對象に於て自己を發見する事だと云ふ。必然的創造要素を多分に含んでゐる現在の我々南溟寮保健部は、その創立が淺いだけに、一段と飛躍した創造が要求されてゐる。植物が柔らかな根から、やがて芽を着け花を着けるに至る經路が示す樣に、又どれ程の困難と試練を土地と氣候から受けねばならないか。

我々はこれら困難試練を甘受する。然し我々は飽く迄創造に從事する。

我々は單に確かな意志を持つのみでなく、回顧的ではない建設的保健部を創立せんとしてゐる。

初代幹事が團成した創業の獻身的努力を受繼いで、我々保

健部の使命を顧みれば時代の活動と歴史のしぶきを受けて偉然屹立せる南溟寮を想起する。熱の供給のみが我々保健部の仕事ではない。然り、我々も又南溟寮推進の一分子である。

我々保健部の生命の火が燃燒する。

我々保健部には今新たなる課題が課せられてゐる。それは南溟寮の歴史を永遠の象徴と見る事であり否むしろ歴史の中へ超越して歴史に於いて、永遠の今を行ずる事である。

共濟部々史

移管以前

序

南溟寮共濟部は昭和三年に成立し、そして昭和十六年一月に解消した。滿十三年の月日であつた。この間の共濟部について移管解消に到る頃までを初めに概略的に述べ次に移管について述べてみたい。

寮にあつた一つの部の歴史を通觀する時多くのものを學ばざるを得ない。そして色々と考へさせられるのである。共濟部は結局時代の規定の下にありつづけたといへるであらうか。殊に時代といつたもの、特に高校生に課せられた時代思潮といつたものの限定を絶に堅れ得なかつたと云へようか。

以下筆者の力及ばず理解は浅いが、ともかく僅かの紙面に以下概說してみよう。

一

南溟寮共濟部の成立したのは昭和三年五月である。何故寮に生れたかについては、後に移管の說明の折に少し述べてみる。

創設當時の先輩は「寮の自治を謳める以上寮の經濟機關は自營でなければならない、それは單に經濟的御都合主義によるのではなく自治精神から發する結結である。……自營制度を吾人が敢て主張する所以はそれが便宜であり利益であると云ふためばかりでない、實にその制度を通しての奥に自治精神が力强く脈打つてゐるがためである。」と述べてゐた。舊共濟部の有する意義は右に明かであると思ふ。實にかういふ思想的根柢の上に舊共濟部は創設されることとなつたのであり、而して新日本の動向が個人主義的精神の結晶なる表現と、しての自治觀念に偉大なる轉換を使命づけた時、舊共濟部の名實共なる解消が必至となつたのである。共濟部が創設され

て最初に具體化された問題は、そして共濟部を現在にまで方向づけた問題は、集會所（食堂）の改善、經營であつた。しかしこれも決してそれに止るものではなかつた。その點に一つの意義を認めるべきだと思ふ。之に依る學費の貸與を念願としてゐたのである。當時の經濟的狀勢の中にあつて、止むなく廢學する學友をみるとき先輩は之を思はずには居れなかつたのであらう。しかし資金がなく當時尙歴史淺く先輩少かつた本校に於ては資金も得難く、ために資金の構成のため十年の雌伏が必要とされた。「十年後には」と思ひ「捨石」として努力された諸先輩を想ふと感慨量である。

そしてその故に又その故ならずとも本來共濟部の對象は本校生徒であり自覺ある生徒の支持が確保された。

再說すれば共濟部設立の眞の目的は學生生活の改善と學費の補助斡旋に存したのであつたのである。

二

かくして創設された共濟部はすくすくと成長して行つた。共濟部が如何に成長したか、或は推移したかの大略をば概念的に示してみたい。

第一期（昭和三年四年）は請負制度時代とでも呼ばれるべき時代である。初めに食堂のみの經營であつた。此は前にも述べた如く、本來の共濟部の事業とも云へよう。やがて生徒の消費面の負擔輕減のため中間商人を排しての學用品の安價提供を目標として賣店が設置された。賣店はその折より自營である。翌四年九月には第一回生計調査が斷行された。その意圖目的については今更多言を要しないと思ふ。又四年四月には共濟部後援會が出來た。

次に來るものは食堂の自營轉換期（五年）である。之は第一期と第二期との間の過渡期である。四年當時の請負人の更迭から色々として遂に昭和五年十一月四日歴史的自營制度が初まつた。

それまでの請負制度には多くの缺陷がが存してゐた。經濟的にみても少數の共濟部食堂の利用者のみを對象とする請負制の營業は矛盾を含んでゐる。そしてここに存する深刻な矛盾解決のため必然的に請負制度を廢止して中間商人を排し一率に自營制度に移らざるを得ない。制度上より見ても請負制度は請負人の代る毎に種々の問題（特に法律上）を起し易かつた。而も常に適當なる請負人を探し出す事が出來なかつたかくして請負制度の永續は不可能となり當然自營制度に轉換

せざるを得なかつたのである。

かくて自營轉換により共濟部は眞に自立的となつて次の時代に入る。

第二期（六年より十四年頃まで）この間は自營完成發展期と云へる。理髮も加へられた。しかしこの間に共濟部の著しい變貌がなされた。即ち昭和六年に共濟部資金の構成が廢止されて「學生の學費低減」が新なる目標となつたのである。當時としては社會の情勢と關聯して共濟部存續のためなされたのであつて誠に止むを得ざるの事情もあつたと思はれる。さあれ、爾後共濟部は事業的なものに方向づけられるに到つたのである。事實を超えての存在を見ず、事業のために事業がなされた。そしてこの間に色々と事件はあつたが、着々として事業はその基礎を固めて行き、遂には外面よりすれば事業のみといふ風に見られる程になつた。（この點は移管の際改めて認識をしたのである。）勿論部内には厭々たる共濟同窓會利增進の精神が流れてゐたのである。この點誤解を避けたい。この事業の基礎の一應の確立といふことが、移管といふ重大なる結果を持つのであつたが知るよしもない事であつた。

第三期（昭和十五年より現在まで）第二期に於て作られた性格はその後ずつと續りつづけた。そしてこの第三期に入ると又一つ新な限定を加へられる事となつたのである。それは支那事變の進捗に伴ふ配給制の確立といふ國家的要請に應じたものであつて、高校生に對する一種の配給機關的な性格である。現在の厚生部を見ればそれは直に判ることである。そしてこの二性格が重り合つて現在の厚生部にまで及んでゐる。

以上共濟部をその事業を中心としてその推移成長を素描してみた。もとより尠い紙面に仲々盡し得ない所である。そしてこの共濟部の健かな營みに關係された諸先輩を想ふ時、この叙述が誠に申譯ないものであることを痛感するのである。が、やはりその一面は捉へ得てゐると確信する。

移管について

（昭和十五年九月より昭和十六年一月まで）

序

共濟部創設されてより十有餘年を經て、昭和十五年ともなれば支那事變の進展に伴ふ諸種の原因理由のため、共濟部は諸種の物質的制約をその事業經營に於て受けざるを得なくな

つてゐた。創設の始、諸先輩が拂はれたのとは異る苦心が異る方向になされるやうになり始めてゐた。その最適例は同年五月の米の配給問題であらう。食堂が就食者に食べさせるべき明日に關して今迄にない苦心が拂はれ、奔走がつゞけられた。當時の諸先輩委員の奮闘は、その努力の甲斐あつたのであるが、創設當時とは異る條件を暗示したのである。共濟部の事業は漸く基礎が出來落付き初めてゐるといふ事は、その初め數人の就食者しか有しなかつた時代の食堂から如何に變つて來たかを如實に示してゐる。しかも外部世界も又變つて來てゐる。この二つの事はつまらぬやうに見えるかも知れぬ。しかしこの中に今日の厚生部の運命の一端の豫言を見得るのである。高校生に對する一種の配給機關的傾向の萌芽は茲に見えるといへよう。

そしてその年夏には、國家の要求に應じてなされ始めた政治新體制と相應じて、最も根本的な教育の分野の中で最も大事である高等學校の學友會の再編成〃學園の新體制〃なるものの大綱が文部省より發表された。實に昭和十五年八月下旬のことであつた。この中で共濟部の動向も移管の方向に於て自づと問題となり始めんとするのである。

九月我々が再び南溟寮に歸り來つた折我々を待設けてゐたのはこれであつた。そしてその解決に委員は勇躍飛込んだのである。

九月二十一日共濟部委員の交替があり、近藤、豊崎、寺尾の三君は後援會員となつて勇退し、岡田穣留委員と共に岡宗小笠原、島谷、京極が實際の事務に當ることとなつた。

一

新聞紙上にも發表された如く文部省原案といふのは次のやうに新組織を指示するものであつた。即ち總務部が上にありその下に四部を設ける。國防訓練部體練部文化部生活部である。その各部に各班を設け在來のものを吸收し、且それを各校の特殊事情に應じて然るべくやるといふのである。

右の文部省原案で生活部がどうなつてゐたか正確に記憶してゐないが、少くとも當時の共濟部事業を事業面よりみて含んでゐたやうである。

そして九月二十三日、岡本生徒課長より高知高校の試案を示された。それは本部の下に武道部體練部文化部生活部の四部を置くものであり、本校の特殊事情により國防訓練部は體部を置くものであり、本校の特殊事情により國防訓練部は體かゞその系統のものを武道部に合めて、體練部を武道體練の

二つに分けたものである。生活部試案の内容はまだあまり出來てゐなかつた。が勿論共濟部の移管といふ内容を含んでゐた。

然して共濟部を目指してその事業的方面のみを見、これに因はれ、部としての傳統的精神が果してどの程度に保持され特色づけられるか、これは實に大いなる問題であつた。とにかく文部省原案が、現實に對してどれ程迄に考慮されてゐるか、若し之を移管して經營を學友會組織でなすといつた形式上の點丈で移管が完全に實現し得られるものか、これが當時の委員の最も心配した點であつた。

が委員としては之に對する態度を決定せねばならない。元來共濟部の學友會移管は古くより問題となつてゐる。十週年の寮史にもこの事は記されてある。そしてこの移管については今迄充分に論議されて來てゐた。

共濟部が何故に寮の一部として誕生したか。簡單なやうには見えるが實は重大なる意味を持つてゐるのである。當然學友會に屬すべきであつたならかゝる組織が寮に生れたのは決して偶然とは思へない。若干その理由をあげてみよう。

（一）共濟部のやうな組織の地盤は具體的な力强さのあるものであらねばならない。これは寮生諸君に當つてみて直に判る筈のことである。共濟部が寮の一部として寮の委員たる共濟部委員によつて先輩と二百の寮生に對する責任を負ふ事を通して運營されて來た事實はこの證明である。その持つ愛着に於ても熱情に於ても先輩はこの責任を感じてゐた。つまり同じ棟に居住する同窓の事業と云ふ意識と常に纏つた全體としての對象を持つてゐると云ふ點で、寮は學友會と比して具體的な力强い背景であつたと考へられるのである。

（二）責任に伴ふ自覺と寮が外部の營業者に依存せぬと云ふ空氣の存在も共濟部の育成に必要であつた。そして委員五名の活動によつてのみ、かく共濟部は發展したのである。勿論後援會の存在を忘れてはならない。現委員とそれと相談し協力する後援會の活動に傳統も生れて來た。そしてそれは從來學友會に屬する事によつて生じ勝な分散的孤立的傾向をも救つたといへようか。未だ外にもあまたあるが、――かういつた理由で寮は共濟部にとつて必要であつた。然し今は異る。學友會は根本的に再組織されて報國會として新發足するのである。そして共濟部の協力即移管が求められてゐる。茲に委員は如何にすべきであるかと熟慮せざるを得なかつた。委員

は後援會諸先輩と共に熟慮をした。九月二十四日の後援會が先づ問題となつた。この時は確定しなかつた。が十月九日の後援會で遂に學友會の新組織に屬するといふ最後の決定がなされた。これは實に共濟部の歴史にとつて劃期的な出來事である。そして委員は次第に覺悟を決めて行つた。

かくして遂に共濟部にとつては第二の誕生たる報國會入りは委員側によつて決定された。

二、

移管の態度が決定すると、漸次生活部の全貌が明になり始めた。以下順を追うて述べてみる。

最初の生活部に關する漠然とした試案はやがて分明なものとなつた。それは生活部に三班を置かうとするのである。在來の共濟部の事業を食堂賣店理髮委託販賣等の面で繼承すべき共濟班と、生徒の保健衛生藥品の事務を扱はうとする衛生（保健）班と宿所の斡旋とか家庭教師の世話とか特に受驗生の入試の折の宿所斡旋とかを扱ひ若干を共濟部より繼承すべき福利班とこの三班を置かうといふのである。この原案に對して檢討が加へられた。そして在來の共濟部が發展的解消をなす以上、共濟部を食堂中心のものと賣店中心のものとの二つに分ち、二班を作り、保健班と福利班とを合せたものを一班とし、合せて三班としてはといふ案が出來、之が是とされる事となつた。そして茲に今日の食事、販賣、福利三班の區分が定つたのである。

食事班は食堂での食事喫茶を中心として事業をなすといふ事に定められた。幹事はその定員を五名とした。これは當番のこと等を考慮に入れての上でかう決めたのである。食事班には岡宗と嶋谷とが殘留に定り、新しく一年生の三幹事を迎へて在來あつたとみられる弊風をこの際一掃して新しく進まんと大いに乗氣となつて來た。そして當時文一甲二古賀治、文一乙左藤惠、理一甲白川和久の三君を新幹事とすることに交渉し内諾を得て指命を待つばかりとなるといふ程に準備が進んだ。

販賣班は賣店、理髮（之は職人の居ないためやつと休止してゐる）諸委託販賣を中心とする事となり共濟部の折には食堂と一緒であつたのが別れることとなつた。この理由は幹事の負擔輕減の目的のためである。しかし一方幹事が分業化してしまふことは嚴に戒められねばならぬ事であり、この弊には陷入らぬやうしかも在來のやうな負擔は輕減出來るやうと

いふので幹事は三名と定められ、小笠原が留學し新しく當時文一甲一美馬敏男と文一乙遠井良憲とを幹事として迎へることに内定した。

右の二班以外のあらゆる部門を含むものを福利班と名付けた。生活部の持つ根本目的は實にこの班に存するといふ譯で、新しく生れる他のすべてのものと等しく大いなる期待が抱かれた。そして此には舊委員中より文一甲一京極純一が當り當時文一甲一西森一正、文一乙尾崎驥の二君が新幹事となることとなつた。

かく三班各々準備されたのであるが勿論短時日の間に成つたのではない。少からぬ努力と苦心とが必要とされた。然し委員は新しきものへの希望と熱情を抱いて樂しく準備をなしたのである。

部の名稱は厚生部と決定された。生活部といふ名稱より厚生部が何故とられたか色々理由もあらう。仲々よい名だと思はれた。部幹事には岡田汎廣がなることになつた。

この面からの準備の外にまだ爲すべき事があつた。細則の條文とか帳簿とか色々あつた。

厚生部の細則の條文を作製するのは仲々苦心を要した。寮生規約の中の共濟部の細則をもとにして、委員と後援會の先輩とは、右の内容を盛込んだ條文を作つた。そして一應原案が完成すると委員後援會本部と三者會同して之を檢討した。永く殘るものであり、唯一の成文法として後輩を制約するものとなるであらうからして忌憚なき檢討がなされた。條文の細部とか言葉遣ひとかは若干改められたにしろ殆ど全部が採擇されて内容には毫も變化は加へられなかつた。かくして細則は出來た。只厚生部細則として獨立せず他の一般細則と並べられてある事のみ遺憾である。

右の細則にも書かれたのであるが、厚生部の會計上の特質は維持された。即食事班販賣班の會計は自給自足の特別會計と定められた。福利班は勿論本部よりの豫算によることとなつた。

又決算の關係上帳簿上の便利上等よりして、食事販賣の兩班の帳簿は十二月末より切換へられて一月より分離し新として記入を始めた。

右の如く準備完全になつて昭和十六年一月十一日南溟報國會の發會式と共に南溟寮共濟部はいはゆる發展的解消を遂げ厚生部が生れた。

それでは共濟部にとつてのみならず寮にとつても歴史的事件である筈のこの移管が寮及寮生に對してはどの樣な關係にあつたか。

一月二十二日寮生大會が催された。そして共濟部の移管に關する事後承諾がなされた後、寮生大會の決議によらずに移管されたことに對し二三の質問があり、これに對して岡本生徒主事、大和總務の極めて熱と誠の説明があり、全會一致で移管賛成の決議が改めてなされたのであつた。寮生も寮もこの移管に遂に與つたのである。

斯くして昭和十六年一月南溟寮共濟部は消滅したのである。そして新しく南溟報國會厚生部が成立したのである。

三

今迄移管問題のみに紙面を費し過ぎたかも知れない。然し昭和十五年九月以降の共濟部史は結局移管を中心として動いてゐるといへるのであるし、この間を最も根本的に方向づけるものなのであるから勢ひ之を中心問題とせざるを得ないのである。

然しこの蔭にあるのであまり人にあらはれないが之に次いで重大なものとして、共濟部が時代の進展と共に漸次高校生に對する配給機關的傾向を帶び來つてゐる事を見逃してはならない。食堂で米の配給を受けるのも、砂糖の配給を受けるのも寮の炊事部と共に、本校生全體に對して、泌々强い責任感の下に行はれる樣になつたのである。これが現在の厚生部を規定する性格の一つになるのである。序に少し述べたやうに共濟部の事業が一應確立したために、逆に事業が共濟部の理想とか性格とを規定するに到つた感があり、當初共濟部が抱いた苦學生救濟と云つた理想は厚生部の成立と共に一應終止符をうたれることゝなつた。

今一つには諸物資の缺乏とか人手の不足とかが逆に事業を規定するのである。

以上の二つをみても判るやうに確に時代の相違變化は明に共濟部へも響いてゐる。そしてそれが漸く激しくなつて行つた半ヶ年である所にもこの間の共濟部史の一つの性格特徴があると思ふ。

短い半ヶ年であつた。守成の時代であつた。委員は事業の範圍を廣めるよりも、現在行つてゐるものに現はれて來る障害と戰つたのであつた。配給制度の出現による苦心も、人手のないための苦心も、色々と苦心があつた。戰つた守成の時

代、しかもそれは新しい厚生部を生み出すべき時代であつた。今振返つてみて仲々の時代であつたと思ふ。委員全部絶妙の才を有してゐたでなく、只努力した時代といへよう。色々な意味で一面、面白い時代でもあつた。共濟部創業の先聲に比して共濟部最後の委員として必ずしも十分でなかつたと痛感してはゐても。

岡田部幹事始め岡宗、小笠原、京極、嶋谷の諸幹事も實によくやつて呉れた。

之を要するに厚生部も亦修練機關でありその道場でなければならぬ。では厚生部では何が修練されるのか。外でもない全體への奉仕の強い責任感である。國家の指導者たるべき高校生の求めるものは、この烈々たる責任感の、それ故の熱と愛との精神である筈であり事實さうである。厚生部が報國會の一翼として誇り高い存在を持ちつゞけ得る意義も亦茲にあると思ふ。

編輯後記

この略史編纂の目的は、寮生諸君に南溟寮の現在迄の歴史的變遷の經過及び現在に於ける時代的展開の動向をよく察知して貰ひたいが爲であつた。我々は高知高校生たるの矜持を有たう。南溟寮生たるの自覺を持たう。而して「高知高等學校のプライドは南溟寮に在り。」と公言して憚らず、南溟寮こそ校風發揚の中心であり、寮生の行動は直ちに校風そのものにならねばならぬ。江部精神が我々南溟健兒の象徴たるは言ふ迄もないが、この精神が本當に生きた流れとなる爲には、年毎に入れ換る寮生各自の自發的な實踐的把持を俟つのである。

天野貞祐氏の言葉に、「傳統とは一つの生命をもつた統一體が多年に亘る創造的活動を通じ、それに媒介されて有つやうになつた固有の型である。」と言はれてゐる。この創造的型である傳統は單に受繼ぐものではなく、我々が努力奮鬪して獲得し生成するものである即ち傳統と創造との相互作用により、寮生活の眞の意義が進展する。

千代總務は、「日本一の寮」を標榜して邁進して來た。今や片岡新總務はこの理想への意欲に然えてバトンを繼承したのだ。「日本一の寮」への可能性が實現する迄には、未だ遠遠の感が深い。併し寮新體制の樹立の大和總務時代が千代總務に及ぶや、大東亞戰爭の大詔が渙發せられた。宣戰より既に半歳、赫々の戰果が日々に報道せられてゐる今日、この世界史的衝動は力强く我々をして無限なる大東亞文化の建設へと驅立てる。かゝる歴史的必然性により我々は南溟寮のより高き文化の創造、より深き傳統への思慕を希求し意識する。

從つてかゝる歴史的現在に於て寮史を主體的實踐的に把握しなければならない。故に先に發行された寮史と現在編纂した略史とではその時代的意義の相異からその立脚點の違ふのは當然であつて、單なる拔粹に止らず、現在的見地より批判を加へ、或ひは削除し、或ひは修正した個所も少くないのであつて、この點は御諒承願はねばならぬ。

かのジンメルは言つてゐる。

「未來に對する力を持つもののみが、過去に對して本當の評價を下す。」と。

× × ×

願れば總務部からこの計畫を提示されたのは寮の白梅が如月の月光に楚々たる清香を放つてゐた下旬の頃であつた。日曜と雖く閑散であつた寮史編纂部として我々幹事三名は欣然としてこれに應じたのではあるが、僅かの人數で短時日の間に完成するには荷が重すぎる感に感じた。そこで各部部史は夫々各部幹事に委任して援助を願ひ、四月二十日までに原稿を提出して貰ふことにした。三月の休暇には吾々三人は後愛受驗生の世話かてら寮に歸城して仕事に取掛つた。この休暇中井浦と井島は數日歸省したが東京の吉野は全く殘寮してゐた。然るに吉野は三月末に病氣の爲退寮することになり、代りとして豐浦を幹事に迎へた。併し吉野は相變らず仕事を續けることとし、豐浦は日誌その他雜事を手傳ふこととした。その間絶えず相談に與つて教いた寮史編纂部理事米原先生には、或ひは寮の幹事室、宿直室に、或ひは先生の御宅に於て御教示を仰ぎ御多忙中にも拘らず校閲、添削に多大の時間と勞力を御割き頂つた。こゝに衷心より厚く御禮申上ます。又各部幹事の積極的な援助に對し深く感謝の意を表します。

さて本史に校長先生、岡本先生宮田先生から夫々序文を賜つたことは編輯者の最も光榮とする所で

昭和十七年十一月一日　印刷
昭和十七年十一月一日　発行
（非賣品）

編輯人代表者　高橋　貞
発行所　東京都神田区今川小路
電話神田（二五〇）〇四〇〇番
印刷所　東京都神田区錦町一丁目
印刷人　東京都神田区錦町一丁目
印刷所　仁愛印刷所

貸本票
383番　81集　年　月　日
南海漁業株式会社
備考
1冊
18

198
E

283
81